

山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。
現役山大生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1 外来患者の診察にあたる土田先生。診療人数は夏場で一日140人前後。かなり過密なノルマながら患者さん一人一人にとっても丁寧な対応と評判。フレンドリーな笑顔で受診者の緊張や不安を取り去ってくれる。

2 昼食後の約1時間を往診の時間にあてている。寝たきりの患者さんが来院するのはとても大変。往診なら車で十分で済むのだからと、極力、往診の要請には応えたいと開業時の理念としっかりと貫いている。

3 高校時代にやっていた空手を再開して今では指導者。空手を通して子どもたちの心身を鍛錬するとともに、土田先生もエネルギーを充電。教え子たちは全国大会でも優秀な成績を取めるようになってきている。

地域医療の充実と子どもたちの健全な成長を願い、日々、往診に空手指導に奔走するドクター。

土田秀也 医療法人「土田医院」理事長

幼い頃、肺炎で命を失いかけたことがあるという土田秀也さん。その危機を救ってくれたのは往診に訪れた医師だった。そんな体験が少なからず土田さんの生き方に影響を与えているのだろう。中学の時に突然「自分は医者になる」と両親や先生に宣言。いずれ何かしら職に就かなければならない、それなら医者になって人の役に立ちたいという思いに駆られたのだ。土田さんの夢を両親や兄弟も後押ししてくれた。浪人はしてもいいが、私立大学はダメという指令通りに浪人はしたものの山大医学部に見事合格。大学では柔道部に入り、学業・部活ともに仙道前学長の指導を受け、学生生活を過ごした。他学部の学生たちとの交流を通して、みんなそれぞれ進む道に夢を持っており、医者もその一つに過ぎ

ないということに気づかされた。総合大学だからこそ得られた感覚、今思えばそれがよかったと当時を振り返る。

卒業後は、大学病院や県立病院での勤務医を経て11年目に開業。本当のところ、土田さんには開業の予定も意志もなかったのだが、ある出来事をきっかけに開業へと踏み切ることになる。それは、若いガン患者を病院で看取って感じた悲壮感と、寝たきりの患者を外来に連れて来る費用と家族の労力を考えると往診が望ましいにもかかわらず、それが叶わない現実。自らが理想とする地域医療に少しでも近づくために、患者さん本意の往診と日曜診療にこだわった「土田医院」を出身地である鮭川村のお隣、新庄市に開業させた。

地域医療と同様に土田さんが力を注いでい

るのが健全な青少年の育成。医院の敷地内には道場が併設されており、そこで空手の指導にもあたっている。土田さんの5人の子どもたちもみな空手を通して心身を鍛えてすくすくと成長している。さらに、母校に対しても何か支援をということで、来年度から「山形大学エリアキャンパスもがみ土田秀也奨学金」を創設し、新庄最上地域出身で山形大学への進学を希望する学生1名に奨学金を提供してくれることが決定した。「生まれ変わってもまた山大に入りたい」という言葉で山形大学への思い、誇りを語ってくれた土田さん。地域医療に献身的に尽くし、地域の子どもの健やかな成長を応援する、そんな卒業生を輩出していること自体、山形大学にとっては非常に誇らしいことといえるのではないだろうか。

信念の成果